

## 促成ナスにおけるミナミキイロアザミウマの発消長と被害

松野 博・家入 章 (熊本県農業試験場)

MATUNO, H. and A. EIRI: Occurrence of *Thrips palmi* KARNY and Damage on Eggplant in the Greenhouse

ミナミキイロアザミウマは熊本県では1979年に芦北郡津奈木町に施設栽培のナス、キュウリで初めて発生が認められた。その後、発生分布域は年々拡大し、果菜類の被害は大きく、ナスでは最重要害虫となるに至っている。そこで、ナス主産地である飽託郡飽田町の促成ナスビニルハウスで、1982年9月より1983年5月まで本虫の発消長と被害の実態を調査し、防除対策に資した。

## 1. 試験方法

一般農家のビニルハウスで、薬剤防除に青竜防除を組合せた青竜防除区と薬剤防除のみの一般防除区を設け、各区434㎡の1区制で試験を実施した。供試品種は黒陽で9月21日に定植した。薬剤防除区は青竜を5株に1本(16.7本/㎡)の密度で、定植時に青竜の下位部が地上高30cmになるようにつり下げ、その後はナスの生育に応じて、ナスの樹高の中位につり下げた。青竜の交換は10月下旬、11月下旬、2月上旬の3回実施した。

調査は、各区に設けた青竜への誘殺状況、葉上での生息密度および葉・果実の被害状況を調査した。

## 2. 結果および考察

1) 発消長と被害 ハウス内における青竜による誘殺頭数および葉上の生息密度は、定植期より11月上旬まで高く推移し、11月中旬より気温の低下とともに急激に減少

した。11月中旬の平均気温は、ハウス外の平均気温が12.7℃、最低気温は7.2℃、最高気温は18.0℃であった。葉上では12月中旬まで生息を認めたが、12月下旬より翌年の5月まで生息を認めなかった。しかし、青竜には低密度ではあるが、連続的に誘殺された。

葉の被害は定植期より11月下旬まで、また、果実の被害は収穫初めの10月上旬より11月下旬まで高く推移し、12月に入って急激に減少したが、1月初旬までわずかに認められた。

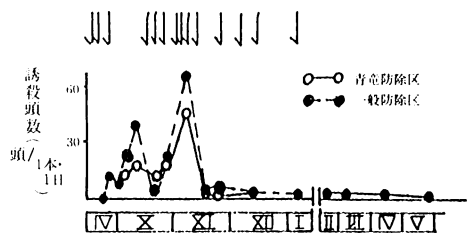
試験ハウスでは定期的に薬剤防除を実施したため、春先の発生は認めなかったが、周辺のハウスでは4、5月に発生被害が目立つ圃場もみられた。

2) 青竜による防除効果 青竜防除区は一般防除区に比較して、青竜による誘殺状況は10月中旬を除き低く推移した。葉上の生息密度および葉の被害は、10月下旬より低く推移し、果実の被害は栽培期間を通じて、少ない傾向で推移した。

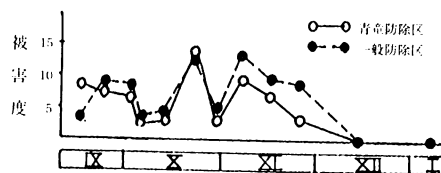
## 3. まとめ

以上の結果から、9月下旬定植の促成ナスでは、定植期から11月中、下旬までの発生被害が多く、冬期間は少ない傾向にある。

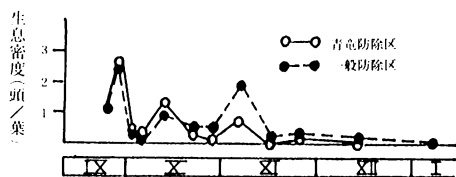
青竜をハウス内につり下げた薬剤防除を行うと、薬剤防除のみの場合より、生息密度は低下し、被害も少なくなる。なお、本試験は本虫の寄生苗がハウス内に持ち込まれた経緯があり、無寄生苗での検討が必要である。



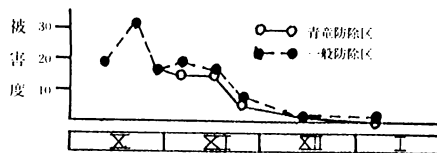
第1図 青竜による1日当たりの誘殺頭数の推移  
注) 矢印は薬剤散布(2月以降は省略)



第3図 葉の被害度の推移



第2図 葉の生息密度の推移



第4図 果実の被害度の推移